

平成 21 年 3 月 3 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520608

研究課題名（和文）ムハンマド伝の研究：ムハンマドの歴史の実像を求めて

研究課題名（英文）A Study on the biography of the Prophet Muhammad

研究代表者：後藤 明（GOTO AKIRA）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：50079224

研究成果の概要：

イスラームを説き起こした預言者ムハンマドの歴史の実像は必ずしも明らかではない。本研究は、ムハンマドの生涯を伝えたもっとも古い記録であるイブン・イスハークの『預言者伝』の全体を邦訳し、それを他の歴史資料とつきあわせて、多分に奇跡物語を含んだ歴史資料の全体像を提示することを目的とした。研究成果は、上記のムハンマド伝の、詳細な注を付した邦訳を4巻本として、2002年度から順次公刊することによって示される。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
平成 20 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：イスラーム、ムハンマド、預言者、コーラン、ハディース

1. 研究開始当初の背景

(1) イスラームを説き起こした、7世紀のアラビアの人ムハンマドに関して、伝承という形でおびただしい情報が残されている。その伝承は、ムハンマドの死後からムスリム（イスラーム教徒）のあいだで口頭で伝えられ、ムハンマドの死後100年以上たった時代にいくつもの書物にまとめられた。伝承の真偽に関して、ムスリム知識人のあいだで当初から議論があり、真偽を確定するための伝承学が発達していくが、それは主としてイスラーム

法学のための議論であって、ムハンマドの歴史の実像は考慮されていなかった。

(2) ムハンマドの伝記的記録を伝える伝承は、法学的議論とは別な形で、歴史学者のあいだで記録されていった。それは、多分に奇跡物語を含むもので、近代の西欧の学者によって真偽が議論されてきた。ムハンマドの言行に関する個々の伝承ではなく、伝承の総体をできる限り網羅的に探ることにより、ムスリム知識人は、何を後世に伝えたかったかが理解されるはずであるが、その作業をなおざり

にされてきた。

(3) イスラーム法の議論の素材としてのムハンマドの言行を伝えた伝承集(ハディース集)は、日本語訳が2種あり、また英訳などの欧米原語訳はかなりある。しかし、ムハンマドの伝記に关しては英訳が2種あるだけで、全体像の把握は困難な状況にある。

(4) 研究代表者である後藤 明は、研究分担者である医王秀行などとともに、9年にわたって、ムハンマド伝の研究を進めてきていた。

2. 研究の目的

(1) 今日のイスラームを理解するために、イスラームの原点にさかのぼって、イスラームを説き起こしたムハンマドの思想と行動を学問的に探求することが第1の目的である。

(2) 奇跡物語を多分に含むムハンマドの伝記の全体像を探り、8から10世紀ごろのイスラームの知識人が何を後世に伝えようとしたかを理解することが第2の目的である。

(3) 現在、ときには誤解を含みながら多様に理解されているムハンマドの歴史的事実を、イスラーム知識人が伝えようとした情報から、可能なかぎり探ることが第3の目的である。

3. 研究の方法

(1) 基本的なテキストとして、イブン・イスハーク原著(8世紀の人)、イブン・ヒシャム編注(9世紀の人)『預言者伝』を選定し、各種の刊本を照合しながら、その全訳をおこなった。なお、この作業は、平成12年からおこなっており、平成21年度中に完了する。

(2) 『預言者伝』に記載されている個々の出来事を、他の歴史文献の記述と照合して、その異同を明らかにしたうえで、『預言者伝』の記事の特色を明らかにした。

(3) 『預言者伝』に採録されている記事をイブン・イスハークに伝えた伝承学者のすべて(300人を超える)の経歴を調査し、後代の歴史学者の情報源と比較して、『預言者伝』の採録した情報の特色を調べる。

(4) 『預言者伝』が引用しているコーランの文言を、現行のコーランの版本(いわゆるハフスからアースィムに伝わった読みにもとづいている)を照合し、その異同を調べ、イブン・イスハークの時代(8世紀なかごろ)のコーランの読み方の一種を確定する。

(5) 『預言者伝』が引用しているムハンマドの言葉を、イスラーム法の基礎となった伝承集と比較してその異同を調べ、双方の特色を導き出す。

(6) 『預言者伝』が引用する詩を、個人詩集などと照合して、その異同を調べ、当時の詩がどの程度正確に後世に伝わったかを検討

する。

(7) 『預言者伝』の邦訳を、詳細な注を付して刊行すべく、その準備を進める。

(8) 内外の研究者を招聘して、ムハンマド伝の研究に関するシンポジウムを開催し、研究成果を示して批判を仰ぐとともに、情報を交換する。

4. 研究成果

(1) 『預言者伝』の邦訳は、下訳を完成させた。21年度中に原稿を仕上げ、22年より、4巻本として岩波書店より順次刊行する予定である。

(2) 『預言者伝』の最初は、ムハンマドの祖先に関する記述と、メッカの歴史である。祖先に関する記述は、主としてアラブ諸族の系譜よりなる。系譜に関する系譜学は、イブン・イスハークのほぼ同時代人であるイブン・アル・カルビーの系譜大全が参照すべき文献であるが、両者を比較すると、若干の食い違いが見られるが、大筋において一致している。8世紀のなかごろには、アラブ諸族の系譜が整理されて、ほぼ定説が出来上がっていたことが確認できた。しかしその出来上がった系譜は、かなりの操作が加えられたものであることも確認できる。

アラブ諸族の系譜は、あくまで系譜であって、系譜にもとづく社会集団(部族という言葉で現在の研究者は理解している)は、必ずしも硬いまとまりを持つ集団ではないことも、断片的な事件を網羅的に調査することによって確認できた。イスラーム時代前のアラブ人は、系譜意識をもちながらも、個人的な利害のよって、かなり自由に集団を形成したり、集団から離れたたりしているのである。

ムハンマドが属していたクライシュ族は、『預言者伝』では、また他の歴史資料でも、「族」という言葉をつけて表記されていないことが確認された。クライシュ族は、血縁に基く集団というよりは、メッカという地に住む住民を指す呼称であったとみなされる。

クライシュを構成する支族は固定された集団とはみなしえないことが確認される。また、母親の親族や祖母の親族が個人にとって重要な意味を持つことが確認できる。

『預言者伝』のムハンマドの時代に関する記事(それが全体の3分の2以上を占める)は、コーランにある文言を説明する目的で、挿話が採録される場合が多いことが確認できる。その意味で、『預言者伝』はコーラン注釈書の性格をかねている。

『預言者伝』のムハンマドの戦記の部分は、構成の歴史家の記述の定本となっていることが確認できる。イブン・イスハークの後

輩に当たる歴史家は、ムハンマドに関する情報の過半をイブン・イスハークに頼っていたのである。後世の歴史家の記述で、『預言者伝』の内容を超える部分は、慎重に健闘されなければならない。

『預言者伝』が採録した挿話のなかには、現代人の眼からみるとばかばかしい奇跡物語が少なからずある。奇跡は、『預言者伝』が著された時代の人々がありうることと信じていたがゆえに採録されているので、それらが無碍に排斥してしまうと、『預言者伝』の作品としての価値がなくなってしまう。

ムハンマドの敵となった人物などがムハンマドを批判する会話などが豊富に引用されていて、ムハンマドの時代の人々の感性が理解される。

(3) 『預言者伝』は、個々の伝承の伝達の経路(イスナード)を明記していない場合が多い。それゆえ、後世のイスラーム法の基となる伝承を集めた学者によって、イブン・イスハークの伝えた伝承は軽んじられたわけだが、イスナードを明記する慣習がなかった時代の作品と考えることができる。

また、「巷間伝えられるところによると」、「人々が主張するには」などの表現で、伝えている伝承が疑わしいことをわきまえながらも、同時代の人々が広く知っていた挿話を伝えていることは、重要な点である。

また、同一の出来事で相反する伝承を二つ採録して、「正しいことは神のみぞ知り給う」と結論を先送りしている点も、『預言者伝』の特色となっている。「真実」なるものを探し出すことが、必ずしも歴史家の仕事ではないと、イブン・イスハークは考えていたのである。

イスナードが明記されている場合も少なくない。イブン・イスハークの情報源は多様であり、特定の人物や学派に頼っていたわけではないことがうかがわれる。一方、イブン・イスハークは、生涯の大部分をメディナですごした関係上、彼の情報源は、おおむね、メディナ学派に属すると考えてよい。

(4) 『預言者伝』に引用されているコーランの文言は、現行コーランとは若干の異同がある。このことは、コーランの成立を考える上で重要である。

とくに、105章と106章が、二つの章ではなく、一続きのひとつの章とされているのが注目される。このことにより、この二つの章とされている文言の意味は、現在の解釈とはまったく異なるものとなっている。

イブン・イスハークは、引用したコーランの文言に注をつけている場合が多い。それは、文言の若干の異同とともに、現在の理解とは異なる理解を、イブン・イスハークがしいた

ことを示している。イブン・イスハークの理解は、後輩のタバリーのコーラン注釈にも引用されていることもあるが、それ以外は多くの場合無視されている。記録として残る最も古い時期のコーラン解釈の一つとして、重要視されてしかるべきものである。

(5) いわゆるハディース集との比較で、『預言者伝』に採録されているムハンマドの言葉は、断定的である。ハディース集は、同じ内容でありながら、微妙に表現が違う言葉を複数引用するケースが多いが、『預言者伝』にはそれが見られない。

ハディース集が採録する伝承は、9世紀から10世紀にかけてムスリム知識人のあいだで知られていたヴァリエーションをバランスよく並べて、法の源とすることを目的としていたことが確認できた。

それに対して『預言者伝』は、イブン・イスハークの時代のメディナで知られていたムハンマドの言葉を、そのまま伝えていることが確認できる。

(6) 『預言者伝』に引用されている詩の多くは、9世紀ごろまとめられた詩集や、近年の文学研究者がまとめた個人詩集に採録されている。

両者を比較すると、若干の相違はあるが、かなり一致している。

『預言者伝』の編纂者であるイブン・ヒシャームは、個別の詩の大部分に注を付し、これは間違いなく原著者が挙げている詩人の詩であると断定したり、逆に、詩の権威者の誰もがこれは当人の詩ではないと否定していると記している。イブン・ヒシャームの時代には、詩学が発達し、イスラーム勃興期の詩に関して意見が整理されつつあったことがうかがわれる。

『預言者伝』が引用する詩の一部は、明らかに後世の加筆があったことがわかる。また、ムハンマドの敵側の詩人の詩に、コーランに基く表現が少なからずあること(すなわち後世の加筆である例)が確認された。

以上から、イスラーム勃興期の詩は、イブン・イスハークの時代までに、かなりの改変が加えられ、それが後世に伝えられてことが想定できた。

(7) 『預言者伝』に現れる人名、地名などを他資料と照合して、刊行されるはずの本の注と索引の下書きを整えた。また、コーランの文言とムハンマドの言葉を抜き出し、それを現行コーランやハディース集と照合して一覧にする作業を進めた。

邦訳は岩波書店より4巻本として刊行するための交渉を、書店側と進めた。

刊行されるはずの本は、一般読者を対象と

するが、専門化向けに、重要な単語のアラビア語の転写、コーランの文言を基にした文章の指摘、専門的な注などを付した電子データをあわせて準備した。このデータをどのような形で公開するかは、これからの検討課題である。

(8) 毎週木曜日に定例研究会を開催し、研究代表者、研究分担者、研究協力者が集まり、翻訳作業を進めると同時に、研究情報の交換をおこなった。また、その会に、大学院生や専門家を随時招いて、情報交換をおこなった。

2008年5月に、イスラエルのヘブライ大学のレッカー教授と、国内の専門家3名を招いて、小規模の国際シンポジウムを開催し、ムハンマド伝研究の世界の現状の把握に努めた。

(9)ムハンマド伝研究は、現在、世界で大きく様変わりをしている。ムハンマドの実在や、ムハンマドが生まれ育った町メッカの歴史的存在すら疑う研究者まで出てきている。そのようななかにあつて、ムハンマドの死後百数十年後にまとめられて最古のムハンマド伝である『預言者伝』を、総体として理解しようとした本研究は、大きな成果を挙げ、数年後には、『預言者伝』の詳細な注を付した要約として刊行され、わが国の学会に大きく寄与することができる態勢を整えたと、評価できよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

医王秀行、イスラム勃興期における金銀の流通と鉱山について、東京女学館大学紀要、第5号、1~22頁、2008年、査読無し

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1)研究代表者

後藤 明 (GOTO AKIRA)
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：50079224

(2)研究分担者

医王 秀行 (IO HIDEYUKI)
東京女学館大学・国際教養学部・教授
研究者番号：20269426

(3)連携研究者